『万葉の母』

―「母」の語を中心に―

岡田喜久男

一

元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のやうな蒼白い顔の月である。偖て、こゝに……

明治四十四年九月発刊の雑誌『青鞜』に載せられた平塚雷鳥（明子）の右の一文は、近代女性の覚醒を促すものであった。もちろん今日、女性は病める月では決してないが、太陽であるかと問われれば、肯定するのに聊かためらいを覚える。だからと言って、これから考究しようとする『万葉の母』が太陽であると言うのではない、然しながら、『万葉集』を手にする人は誰れしも、集中の女性が美しく輝いているのを知るのである。日本最古にして、四千五百余首の尨大な歌数を誇る『万葉集』は、その多様さにおいて他に類を見ないが、歌われた女性、歌った女性の人数も多く、身分・内容ともに男性に互して多彩で、「母」に限ってみても勅撰集などに比べると極めて多くの歌に歌われている。それこそ、元始も現代も女性は母になるべく運命づけられているし、そこに大きな喜こびを見出す人も多い。和歌の世界でも、自由に詠歌の対象を撰ぶことの出来る近・現代の歌人達の多くが、母の歌に絶唱を生していることは、石川啄木の「たはむれに母を背負ひて、そのあまり軽きに泣きて　三歩あゆまず」や斎藤茂吉の「のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳ねの母は死にたまふなり」がいかに人口に膾炙しているかを言えば充分であろう。

万葉人達の心に生きた母とはいかなるものであったか、いかに歌われているかを、『万葉集』の「母」の語と、作者及び作歌事情の二方面から、『万葉集』全歌を対象に調べてみることにしたい。ただ紀要の紙幅の都合で、今回は『母』関係の語を中心に論を進めることにし、いずれ改めて、母の詠んだと明かな歌、母の歌と思われる歌を考えることにする。

さて、ここで言う「母」は、文字通りの、辞書の第一義の「母」で、

①親のうちの女の方、生んだり、育てたりしてくれた女親。実母・養母・継母の総称。母親。おんなおや。めおや。〔『日本国語大辞典』小学館〕

と定義されるものである。同辞典に、第二義として説く所の

②物事を生み出すもととなるもの。また、人。

などにあたる、比喩的な「母」は用例として『万葉集』には見えないし、「飛鳥・大和・天地・海」なども、「母なるもの」と言えるかもしれないが、あまりに対象が広がるので今は考察しないことにした。

二

『万葉集』に入る前に「記紀の母」を簡単に見ておくことにする。

『古事記』の中では、父母を「親（おや）」と書いた例はなく、「父、父母、母」と具体的であり、全体で、「父…十八例（父王も含む）。父母…三例。母…十五例。」で「父」と「母」の用例にあまり差はない。結婚に対しても、櫛名田比売（くしなだひめ）の父・大山津見神、宮主矢河枝比売（みやぬしやかはえひめ）の父・丸邇之比布礼能意富美（わにのひふれのおほみ）が主導権を持っているし、「父母」は出るが、「母父」の用例が無いなど、後に述べるように『万葉集』と違う点が多い。ただ「御祖（みおや）」とある十例全てが母親を指すこと、その中、「垂仁記」にある「沙本毘古王の反逆物語」や、「応神記」にある「秋山之下氷壮夫と春山之霞壮夫の話」などでは、立章中で「母」と「御祖」が交ぜ用いられている点など、『古事記』の「御祖」は「親・先祖」とは考えられない。勿論、単に「―之祖」として出る場合は「先祖」を意味するが、それは全て割注で漢文体を採っており、「氏族の出自」を言うのであって、本来の旧辞や帝紀の古伝承とは区別して考えたい。

内容的には、大国主命が兄弟八十神から殺される時、哭き患ひつつ復活させる母・刺国若比売の姿には、子供を命懸けで守る母の様子が重なるし、兄である沙本毘古王に従って死に赴く沙本毘売に対して、夫である垂仁天皇は最後まで救おうとするが、それが失敗した時に

凡そ子の名は必ず母の名づくるを、何とか是の子の御名を称（まを）さむ。

と尋ねる。当時子の命名権が母親にあったことを窺わせる。

用字上では『礼記』「曲礼」に「生曰父曰母、死曰考曰妣」とある「亡き母」の意味の字「妣」が二場面三例用いられているが、全て正確な用法である。

ところで「母」の字は、『古事記』にだけ見られる、上代特殊仮名遣いで言う所の「モ」の乙類の仮名であり、百五十五例がある。次に『日本書紀』における『母』の用例は、仮名の用例（甲乙は乱れている）五十四例を含めて、百九十一例が見出される。同母か異母かを明記するなど、帝紀的な記分に多用されているが、「神武紀」の

初め孔舎衛（くさゑ）の戦に、人有りて大きなる樹に隠れて、難（わざはひ）に免（まぬか）るること得たり。仍（よ）りて其の樹を指して曰はく、「恩（うつくしび）、母（おも）の如し」といふ。時人、因りて其の地を號（なづ）けて、母木邑（おものきのむら）と曰ふ。今飫悶廼奇（おものき）と云ふは訛（よこなば）れるなり。

は、比喩の形ではあれ、母の愛情の深さを素直に表現したものである。

又「推古紀」に、

　是歳（三十四年）、三月より九月に至るまでに霖雨ふる。天下、大きに飢う。老は草の根を噉ひて、道の垂に死ぬ。幼は乳を含みて、母子共に死ぬ。

と饑飢の絶望的状況を母と子の姿を以って描いていて胸を打つ。

「孝徳紀」に出ている有名な「男女の法」は、大化改新の最初の立法であり、生れた子供の帰属について、父に配けるか母に配けるかを具体的に規定している。親族法での男系主義を

　良男良女共に生めらむ所の子は、其の父に配けよ

と第一条に挙げているが、これは当時の社会の主流であった母系性を否定している点で新しいが、他の条で明かなように、「良と奴婢」を厳然と区別するのが真の目的であった。

『日本書紀』でも、「父母」はあるが「母父」の例は見出せない。

三

『万葉集』で「ハハ」の表記は「妣・母・波波・波々・波伴・波播」であり、同義語として「アモ（阿母）」「オモ（母・於母・意母・意毛）」がある。これ等の表記のある歌を対象として考察するので、まず右の表記について述べておきたい。

「妣」は先に述べたように『礼記』にある文字用法が本来のもので、『古事記』の三例はこれに完全に適っている。『日本書紀』では二例あり、一例は「ヒ」の仮名として「雄略紀」にあるが、乙類の「火」の意味の所に、甲類の文字である「妣」が書かれていて違例である。いま一例は、「崇峻紀」で、敏達天皇を、亡き母と同じ陵に葬るという所で「妣皇后」とあるので、これは正確な用法である。

これに対して『万葉集』では二例（一〇二二）（一八〇〇）あるが、いずれも単なる母と思われる所に用いられている。

「母」は他の仮名書き（波波・波播など）の例その他から「ハハ」と発音されていたと思われるもの四十三例（四十二首）、「意毛知知がため（四四〇二）」とある仮名書きの例から推して「オモチチ」と訓むべきだと思われる「母父」が五例ある。この五例は全て挽歌である。

「アモ」は「記紀」では『日本書紀』に一例、「雄略紀歌謡」の中に

　道に闘ふや、尾代の子、阿母にこそ聞こえずあらめ、国には聞えてな

と出ているが、「母に自分の名声は聞こえないにせよ、故郷の人には伝わってほしい」と歌うのは不自然で、『釈日本紀』をはじめとして、卜部家系統の原文「阿毎」を採用し、「天（アメ）＝天上・宮廷」と考える方が正当ではなかろうか。

『万葉集』は四例（四三七六・四三七七・四三七八・四三八三）全てが常陸国の防人の歌であり「アモ」は東国語であると思われる。

「オモ」は「母父（オモチチ）」と訓むだろう五例（四四三・三三三七・三三三七・三三三九・三三四〇）以外に「於母（四三八六）、意毛（四四〇二）、意母（四四〇一）」とあるが、仮名書きの三例はいずれも防人歌である。ただし「於毛（二九二五・二九二六）は「乳母」の意味である。

以上の例からも推定できるように、父と母とが同時に出る場合、

『時代別国語大辞典上代編』に

あもしし（名）東国語。……〔考〕中央語では、父と母をいう場合、常にチチハハといい、ハハチチとはいわない。東国の歌にチチハハの語もつかわれているが、アモ・オモと複合するときは、アモシシ・オモチチで、シシアモ・チチオモとはいわない。この現象を、古い母系制の反映とみる説もある。

と説く如く、東国の歌には「母」を「父」より先に言う場合が多い。これを母系制と結びつける事の当否は別にして、東歌の中に「叱る母」が多い事、『万葉集』の中で単独に「父」が歌われているのは

四三四一　橘の美袁利の里に父を置きて道の長道は行きかてぬかも
（丈部足麻呂）

のただ一首にすぎない事、を考えると、子・とくに娘に対しては確実に父親よりも母親の権利が強かったことが言える。

「オヤ」についてみると、

三〇七七　みさごゐる荒礒に生ふる名乗藻のよし名は告らせ父母者知友（親は知るとも）

とあるように、両親や先祖を意味するが、「母」だけを指す例も、

「家婦が京に在す尊母に贈らむが為に、誂へらえて作る歌」

四一六九　霍公鳥　来鳴く五月に　咲きにほふ　花橘の　香ぐはしき　於夜能御言（親の御言）朝暮に　聞かぬ日まねく……

や

三三五九　駿河の海　礒辺に生ふる海つづら　汝をたのみ母に違ひぬ

一に云はく、親に違ひぬ。

などのようにある。

以上「母」関係の語についてみたが、対する「父」は、「父…二十五例、父公…一例、知知…十三例」の計三十六例で、「母」の半数以下である。

四

私が「母」関係歌として対象にしようとする歌は次の八十三首である。

巻三…三三七・四四三。巻五…八八六・八八七・八八九・八九〇・八九一・八九二・九〇四。巻六…一〇二二。巻七…一三〇九・一三五七。巻九…一七四〇・一七五五・一七七四・一八〇〇・一八〇四・一八〇九。巻十一…二三六四・二三六八・二四〇七・二四九五・二五一七・二五二七・二五三七・二五五七・二五七〇・二六八七・二七六〇。巻十二…二九九一・三〇〇〇・三一〇二。巻十三…三二三九・三二五八・三二八五・三二八九・三二九五・三二九六・三三一二・三三一四・三三三六・三三三七・三三三九・三三四〇。巻十四…三三五九・三三九三・三五一九・三五二九。巻十五…三六八八・三六九一。巻十六…三七九一・三八一一・三八八〇。巻十七…三九六二。巻十八…四一〇六。巻十九…四一六四・四二一一・四二一四。巻二十…四三二三・四三二五・四三二六・四三二八・四三三〇・四三三一・四三三七・四三三八・四三四〇・四三四二・四三四四・四三四六・四三四八・四三五六・四三七六・四三七七・四三七八・四三八三・四三八六・四三九二・四三九三・四三九八・四四〇一・四四〇二・四四〇八。

一見して分ることは、巻によって歌数が大きく偏っていることである。互に関連していることであるが、まとめると次のようになる。

(1)巻十までの歌数が十八首、巻十一以降の歌数が六十五首と大きく開きがあり、特に巻四までには僅か二首があるにすぎない。

(2)巻一・二・四・八・十には対象歌が見出されない。

(3)巻十一・十二・二十に集中し、なかでも巻二十の防人歌の中に、対象歌の三割に当る二十五首がある。

繰り返し言うように、「母」関係の語を中心に選んだ歌であるから、『万葉集』全体の歌の中に、右だけしか「母」関係歌がないと言うわけではないが、直接的に「母」が歌われている以上、右の結果は検討する価値がある、と思う。

○巻一・二は勅撰説もあるように、精撰されて名作の多い、整然とした編成の巻である。宮廷関係歌、即ち天皇・皇子女の作。宮廷歌人の従駕の歌、貴顕の人の相聞歌、柿本人麻呂の殯宮挽歌などが主で、「母」の登場する場は全く用意されていない。

○巻三の二首は、有名な山上憶良の

三三七　憶良らは今は罷らむ子泣くらむそれその母も吾を待つらむぞ

と、自殺した丈部龍麿を傷(いた)んだ、上司大伴三中の歌（四四三）である。

憶良の歌は、大宰府関係の歌の中に入っていることから、神亀末から天平初めの作であるとすれば、年が七十歳位になるし、泣く子が誰の子か問題になるが、少くともこの歌―即ち宴席を退出する口実として子や母を歌う―を許容する世界が大宰府にあったことは確かであるし、又それが許されると憶良は考えた事も注意されるべきである。

三中の歌は、東国出身かと思われる、（丈部氏は防人の中に多く、安房に丈部の地名があることから）龍麿の家族に思いを馳せて歌ったもので、

四四三…　垂乳根の　母の命は　斎瓮(いはひべ)を　前に据ゑ置きて　一手(かたて)には
木綿取り持ち　一手には　和細布(にきたへ)奉り　平らけく　ま幸(さき)くませと
天地の　神祇(かみ)を乞ひ禱め　いかならむ　歳月日(としつきひ)にか　つつじ花
香(にほ)へる君が　牛留鳥(くろとり)の　なづさひ来むと　立ちてゐて　待ちけむ
人は……

と、母が息子の旅の無事を、天神地祇に祈る様子を歌っている。

○巻四は全歌が相聞歌で、「母」が登場しないのは当然のように思われるが、巻十一・十二の相聞歌、あるいは巻十四の歌と比較すれば、それが特異であることは自明である。奈良朝の都会風な新しい歌、家持周辺歌の世界に「母」が歌われていないことは、「恋愛世界」の新しい展開と言うべきであろう。

○巻八・十は、歌を四季で分類し、更にその各季を雑歌と相聞に分けるが、歌も天平期の新しい歌で、上品・流麗で、風流志向の歌が収められている。この巻にも「母」を詠んだ歌は全く見当らない。

○巻十一・十二は目録に「古今相聞往来歌類之上・同下」とあるように、作者不明および人麻呂歌集の八百八十首の大歌群からなっている。両巻に類同歌が多いことから[注一]

このことは両巻がいかに類歌性に富んでいるか、換言すれば両巻所収の歌がいかに当代の歌の平均値的存在であり、従ってまた伝誦性に富んでいるかを示す事実である。

と説かれ、坂上郎女や大伴家持周辺の歌人の歌と関係が深いことから[注二]

両巻が天平の歌人により、作歌参考書として用いられたこと…

が言われるが、歌われている母は、娘の所へ通う男の関所となる場合十例。

二五五七　たらちねの母に白さな公も我も逢ふとはなしに年は経ぬべし

三〇〇〇　霊合へば相宿むものを小山田の鹿猪田禁る如母し守らすも

蚕を養って業を計る母二例

二四九五　たらちねの母が養ふ蚕の繭隠り隠れる妹を見むよしもがに

二三六八　たらちねの母が手放れかくばかり術なき事はいまだせなく

娘を養育する母二例

他となている。両巻の性質が『遊仙窟』を下敷きにした貴族的知的な歌と、民謡風な歌が混在していることについては多くの人が説いているが、中川幸広氏の論に[注三]

歌人の階層は、知識人、貴族、中、下級官人と広く厚く層を成している人々の群であろうということを、特に主張したわけである。

総じて巻の十一、十二はそのような彼等の生活の褻の部分のアンソロジーであるということができよう。そしてこの両巻の歌が非個性的、類型的と批評される部分を持っているのは、この両巻の作者たちが、有名歌人を生み出す厚い基盤の部分を成す階層の人たちをも含んでいるからであろう。

とあるのが大へん示唆に富んでいる。右に挙げた少数の歌からも分るように、「母」を詠んだ歌は、貴族性や、晴の世界と対立する所に生まれたのであった。

○巻十三は長歌を基本とした集で（短歌は全て反歌である）古代歌謡の流れを強く受けているが、巻二十に次いで多くの「母」関係歌を収めている。相聞歌における「母」は一読して分るように庶民の母であるし、挽歌の中では、故郷で待つ、「行路死人の母」である。

巻二十の「母」は全て防人歌の中に出るもので、（このうち四三三一・四三九八の二首の長歌は大伴家持が防人を傷んでの作である。）、天平勝宝七歳（七五五年）難波から筑紫に出発した防人達の限界状況での作であるだけに切々として胸を打つ。国が分り、作者名も明かであるだけに、巻十四の東歌以上に生の息吹の伝わる作品群である。青壮年の男達の母を思う情は、幼な子が母を慕うのと同じで、その卒直な歌いぶりによって一層現実感を増している。

四三五六　わが母の袖持ち撫でてわがからに泣きし心を忘らえぬかも

四三七七　母刀自も玉にもがもや頂きて角髪のなかにあへ纒かまくも

四三八三　津の国の海のなぎさに船装ひ発し出も時に母が目もがも

以上巻々の性質と合せて、「母」関係歌のあり方を探ってきたが、大きく見て、東国、大宰府、古歌謡、庶民などと関係が深く、晴の場、宮廷、貴族社会と対立的な歌である事が分った。

五

次に、前に挙げた八十三首の歌を、歌の場とテーマなどから考えてみたい。歌であるから統一的な分類は不可能であるが、次のように分けると最も『万葉の母像』が浮かび上ってくるように思う。

(1)結婚と母。(2)挽歌と母。(3)防人の歌と母。(4)その他

(1)の結婚と母に関する歌としては、一七七四・二三六四・二四〇七・二五一七・二五二七・二五三七・二五五七・二五七〇・二六八七・二七六〇・三〇〇〇・三一〇二・三二八五・三二八九・三二九五・三二九六・三三一二・三三五九・三三九三・三五一九・三五二九・三八一一の二十一首を挙げることが出来る。『古事記』などで見ると、子供の結婚に対して、必ずしも母親が決定権を持ってはいないようであるが、『万葉集』では、母親の意向が結婚を左右すると歌う例が極めて多い。もちろんここで言う結婚は、殆んど「男女関係の成立」位の意味であって、今日的な意味ではない。ところで以上の二十一首中、父もともに歌われているのは三二九五・三二九六・三三一二だけで、三二九五・三三一二の二首は長歌で、母につづけて対句として父が出ている感のあるものである。歌を男女の進行状態から見ると、

三一〇二　たらちねの母が召ぶ名を申さめど路行く人を誰と知りてか

三五一九　汝が母に嘖られ吾は行く青雲のいで来吾妹子あひ見て行かむ

二五一七　たらちねの母に障らばいたづらに汝も吾も事や成るべき

二三六四　玉垂の小簾の　隙に入り通ひ来ねたらちねの母が問はさば風と申さむ

二五五七　たらちねの母に白さな公も我も逢ふとはなしに年は経ぬべし

二五七〇　かくのみし恋ひば死ぬべみたらちねの母にも告げつ止まず通はせ

二十一首の中で、明かに男性の歌とみられるものは、三二九五・三二九六・三五一九・三五二九の四首で、特に三二九五は両親と息子が結婚について問答をしている珍らしい例である。

三二九五　うち日さつ　三宅の原ゆ　直土に　足踏み貫き　夏草を　腰になづみ　如何なるや　人の子ゆゑぞ　通はすも吾子（以上両親の問いの部分）諾な諾な　母は知らじ　諾な諾な　父は知らじ　蜷の腸　か黒き髪に　眞木綿以ち　あざさ結ひ垂れ　大和の　黄楊の小櫛を　抑へ挿す　刺細の子　それぞ　わが妻（以上息子の答の部分）

娘の結婚に大きな期待をよせる母親として最もよく知られているのは『伊勢物語』東下りの一段である。

昔、男、むさしのくにゝ、まどひありきけり。そのくになるをんなを、よばひけり。父はこと人にあはせむといひけるに、母なんあてなる人に、こころづけたりける。ちちはただ人にて、ははなむ藤原なりける。さてなむあてなる人にとはおもひける

実生活で苦しい思いを娘にさせたくないと思う母親は、身分や貧富の点に特に気を配ったのは当然であった。

三二八九　御佩を　剣の池の　蓮葉に　渟れる水の　行方無み　わがする時に　逢ふべしと　逢ひたる君を　な寝そと　母聞せども　わが情　清隅の池の　池の底　われは忘れじ　ただに逢ふまでに

行方無き心の娘と、「な寝そ」と忠告する母、ではあるが、娘の気持がゆらぎなきものと知れば二人の仲を認め、夫が通って来なくなると、恋の病に沈む娘に替って夕占（夕方、道路に出て、通る人の言葉で占う方法）をする（三八一一）母親であった。娘の歌に父親が出るのは（三三一二）一首で、実質的に父の役割が全く歌われていないのは見事としか言いようがない。子供の養育に母親の力が大きく働く

とは言え、「…奥床に、母は寝たり、外床に父は寝たり…」（三三一二）のように父母が同居している状態で父親を恐れる娘のいないことは不思議である。結局、和歌の世界での結果と考え、現実とはかなり隔りがあるとするのが最も簡単な解釈であろうが、歌は時代を写す鏡である事を思うと、歌は、やや古く、地方的、庶民的な世界を歌ったものと考えるのが正しいであろう。それに対して『古事記』で、

　邇々藝能命に求婚された木花之佐久夜毘売が
僕は得白さじ。僕が父大山津見神そ白さむ。

と云ったり、豊玉毘売命と火遠理命の結婚に常に関与した父・綿津見神の存在、応神天皇に求婚された、宮主矢河枝比売が相談した父・丸邇之比布礼能意富美などは、天皇家との関係が語られるので。「父」が前面に出て来たと考えるべきであろう。即ち、褻の世界の権力者「母」と「晴」の世界の代表者「父」とが、見事に『万葉集』と『古事記』の中で対立的に描かれているという事になる。

(2)挽歌と母に関する歌としては、四四三・八八六・八八七・八八九・八九〇・八九一・九〇四・一八〇〇・一八〇四・一八〇九・三三三六・三三三七・三三三九・三三四〇・三六八八・三六九一・四三一一・四三一四の十八首を挙げることが出来る。

挽歌の手法の一つとして、別れた時の、あるいは家で待つ父母・妻子を具体的に歌うが、

四四三　天雲の　向伏す国の　武士と　いはゆる人は……母父に　妻に子等に　語らひて　立ちにし日より……（天平元年己巳、摂津国の斑田の史生丈部龍麿自ら経き死りし時、判官大伴宿禰三中の作る歌」）

八八六　うち日さす　宮へ上ると　たらちしや　母が手離れ　常知らぬ国の奥處を　百重山　越えて過ぎ行き……床じもの　うち臥ひ伏して　思ひつつ　嘆き臥せらく　国に在らば　父とり見まし　家に在らば　母とり見まし　世間は　かくのみならし　犬じもの　道に伏してや　命過ぎなむ

八八七　たらちしの母が目見ずて　欝しく何方向きてか吾が別るらむ（以上二首「敬みて熊凝の為に其の志を述ぶる歌に和ふる六首筑前国守山上憶良」）

三三三七　母父も妻も子どもも　高高に来むと待ちけむ人の悲しさ

三六八八　天皇の　遠の朝廷と　韓国に　渡るわが背は　家人の　斎ひ待たねか　正身かも　過しけむ　秋さらば　帰りまさむと　たらちねの　母に申して　時も過ぎ　月も経ぬれば　今日か来む　明日かも来むと　家人は　待ち恋ふらむに　遠の国　いまだも着かず　大和をも　遠く離りて　石が根の　荒き島根に　宿りする君

三六八九　石田野に宿りする君家人のいづらとわれを問はば如何に言はむ（以上二首「壹岐の島に到りて、雪連宅満の忽に鬼病に遇ひて死去りし時に作る歌」）

『万葉集』の中には「行路死人」を傷む歌が散見するが、今日からは想像する事も出来ない旅の困難さからすれば、あるいは驚くには当らないのかもしれない。『日本書紀』歌謡にも見出される、聖徳太子の「片岡山の飢者への歌」（推古紀）から始まって、「柿本朝臣人麿、香具山の屍を見て、悲慟びて作る歌」（四二六）、「和銅四年辛亥、河辺宮人、姫島の松原に美人の屍を見て、哀慟びて作る歌四

首」（四二四〜四二七）など挽歌の中に入っているが、

四二六　草枕旅の宿(やどり)に誰が夫(つま)か国忘れたる家待たまくに

に見られるように、「旅の宿り」と「故郷・家族」を対比させるのが典型であった。そうなると、父母、なかでも「母」を歌うものが増えるのは当然であった。

(3)防人の歌と母に関する歌は、「挽歌と母」に挙げた歌も、旅の途上の歌と考えると無関係ではないのであるが、特に巻二十の防人歌に限ったのは、作者の出身地・氏名・製作年代が明かで、集められた事情も判明しているし、防人という限界状況の作品だから、一括して検討したいからである。

四三二三・四三二五・四三二六・四三二八・四三三〇・四三三一・四三三七・四三三八・四三四〇・四三四二・四三四四・四三四六・四三四八・四三五六・四三七六・四三七七・四三七八・四三八三・四三八六・四三九二・四三九三・四三九八・四四〇一・四四〇二・四四〇八の二十五首であるが　四三三一・四三九八・四四〇八の三首は防人達の歌に感銘を受けた家持の歌であるから、それを除いても、巻二十の全防人歌九十二首（昔年の防人の歌九首を含めて）中二十二首、約二十四パーセントの歌に母が歌われていることになる。又家持が詠んだ防人関連歌十七首中三首に母が歌われているのは、防人達の歌にひかれての事と思われるし、行路死人歌の系列に準じて詠んだものとも思われる。

東国（遠江・相模・上総・常陸他）から徴集されて、難波を発ち、筑紫・壱岐・対馬の辺境を守る防人は、三年で交替とは言え、まさしく「古来征戦幾人か帰る」の状態であった。その極限状況での歌であってみれば、家にある家族へ思いを駆せらせるのは当然で、妹(いも)・妻と並んで母が歌われている。

四三二三　時時の花は咲けども何すれそ母とふ花の咲き出来ずけむ
四三三七　水鳥の発ちの急きに父母に物言(ものは)ず来(け)にて今ぞ悔しき
四三三八　畳薦(たたみけめ)　牟良自が磯の離磯の母を離れて行くが悲しさ
四三四二　真(ま)木柱(けはしらほ)讃めて造れる殿の如いませ母刀自面(おめ)変りせず
四三四六　父母が頭かき撫で幸くあれていひし言葉(けとば)ぜ忘れかねつる
四三五六　わが母の袖持ち撫でてわが故(から)に泣きし心を忘らえぬかも
四三九二　天地(あめつし)のいづれの神を祈らばか　愛(うつく)し母にまた言問はむ

中には、母を失っている子を残して防人に発った悲しみを

四四〇一　からころむ裾に取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして

と歌ったものもある。

(4)その他の「母の歌」であるが、

一〇二二　父公に　吾は愛子(まなご)ぞ　母刀自に　われは愛子そ　参上(まゐのぼ)る　八十氏人の　手向する　恐(かしこ)の坂に　幣奉り　われはぞ退(まか)る　遠き土佐道を

（「石上乙麿卿の土佐国に配(なが)さえし時の歌」）とあるように、自らを両親の最愛の子だと言いきる激しさはすがすがしい。

三三一四　つぎねふ　山城道を　他夫(ひとづま)の　馬より行くに　己夫し　歩(から)より行けば　見るごとに　哭(ね)のみし泣かゆ　其思ふに　心し痛し　たらちねの　母が形見と　わが持てる　まさみ鏡に　蜻蛉(あきつ)領巾(ひれ)　負ひ並(な)め持ちて　馬買へわが背

には「母の形見」の鏡が出てくるし、

三八八〇　香島嶺の　机の島の　小螺(しただみ)を　い拾(ひり)ひ持ち来て　石以ち

突き破り　早川に　洗ひ濯ぎ　辛塩に　こごと採み　高坏に盛り
机に立てて　母に奉りつや　愛づ児の刀自　父に獻りつや　愛づ
児の刀自

は、『土左日記』のふなうた

　はるののにてぞ、ねをばなく、わかすゝきに、てきるきるつん
　だるなを、おややまぼるらん、しうとめやくふらんかへらや。

を思わせる能登国の民謡で、コシタカガンカラを両親に奉げる主婦が歌われている。

父や母と呼ばれるのは人間だけではなく、

一七五五　鶯の　生卵の中に　霍公鳥　独り生れて　己が父に　似
ては鳴かず　己が母に　似ては鳴かず…（「霍公鳥を詠む」高橋
連虫麿）

三二三九　近江の海　泊八十あり　八十島の　島の崎崎　あり立てる
花橘を　末枝に　黐引き懸け　中つ枝に　斑鳩懸け　下枝に
ひめを懸け　己が母を　取らくを知らに　己が父を　取らくを知
らに　いそばひ居るよ　斑鳩とひめと

のように、ホトトギスがウグイスの巣に卵を産み、仮り親に育てさせる習性、鳥黐で鳥を捕える方法、という珍らしい題材であるが「母」はここにも歌われていて、面白い歌となっている。

六

「母」の語を中心に『万葉集』の歌を見てきたわけであるが、集中には、作者や作歌事情（題詞、左注から知る）からして、母としての歌と思われるもの、例えば「京師より来り贈れる歌」の反歌

四二二一　かくばかり恋しくあらばまそ鏡見ぬ日時なくあらましもの
を

右の二首は、大伴氏坂上郎女、女子の大嬢に賜へり

などが他に多くあると思われる。ただ本稿では、単純に「母」の語を見ることで何等かの結論が出ないかと探ってみたのであるが、既に繰り返し述べたように、褻の世界、地方の無名の庶民の歌に多く歌われ、娘の結婚を左右し、命を懸けた異国への旅の途中で思い出され、死者を悼む歌で歌われるのが「母」であった。そのような母の姿は、決して万葉の世界だけに限ったものではなく、今日も同じである事を改めて思い出させるが、それも又『万葉集』の存在価値と言うべきであろう。

注一　日本古典文学大系『万葉集三』各巻の解説
注二　前掲書の同所。
注三　中川幸広「万葉集巻十一・十二試論」（日本文学研究資料
　　叢書「万葉集Ⅱ」所収）